

日本で麻農業をはじめよう

聞いておきたい 大麻草の正しい知識



赤星 栄志

あかほし よしゆき

1974年滋賀県生まれ。日本大学農獣医学部卒。同大学院より博士号（環境科学）取得。学生時代から環境・農業・NGOをキーワードに活動を始め、農業法人スタッフ、システムエンジニアを経て様々なバイオマス（生物資源）の研究開発事業に従事。現在、NPO法人ヘンプ製品普及協会理事、日本大学大学院総合科学研究科研究員など。主な著書に、『ヘンプ読本』（2006年・築地書館）、「大麻草解体新書」（2011年・明窓出版）など。

連絡先：麻類作物研究センター
akahoshi@hemp-revo.net

本連載では、大麻草を研究テーマに掲げて博士号を取得した赤星栄志氏が、科学的な視点でこの植物の正しい知識を解説し、国内での栽培、関連産業の可能性を伝える。連載最終回は、前回に続いて国内で麻栽培が60年ぶりに復活した事例を取り上げる。鳥取県智頭町では麻栽培経験のある移住者と地元の高老、町が一体となって麻による町興しが行なわれている。麻栽培から始まる地域活性化に希望が託されている事例を紹介する。

最終回

約60年ぶりの復活が地域活性化に

町の支援で

栽培免許をスピード取得

神戸市出身の上野俊彦さん（34歳）は、2011年秋に鳥取県智頭町の限界集落に家族で移住した。同町を選んだ理由は、森をフィールドにした幼児教育を実践する「森のようちえん」に子どもたちを通わせたいと思ったからだ。移住前は、自然食品業界で有名な松田マヨネーズが出資した群馬県の農場（麻栽培の免許保持）で大麻草（以下、麻）栽培に従

事していたが、東日本大震災による福島原発事故の影響によって離脱を余儀なくされた。上野さん自身が免許を持っていなかったため、移住後の麻栽培は諦めていた。

ところが、同じ集落に住む綾木守さん（当時88歳）から「昔はこの辺りでも苧を栽培しとった」という話を聞いた。苧とは麻の昔からの呼び名である。綾木さんからお手製の麻袋や麻糸などを手渡された瞬間、上野さんは鳥肌が立ったという。「できればこの地で栽培を復活させた

い」と一念発起し、寺谷誠一郎・智頭町長に直談判をした。

寺谷町長は初めのうちこそ「あの大麻草か、マリファナになるやつだよな？」と驚いていたが、上野さんの真面目な話をじっくりと聞いているうちに、町ぐるみで応援することを決断した。「爺さん婆さんしかいない限界集落に移住してきた若者の願いを町がきちんと応援する。耕作放棄地に麻を栽培し、町興しにつなげていく——」、このストーリーを町役場がサポートし、町長自らも免許取得に向けて奔走するに至る。

一方、上野さんは県の窓口提案する前に、町内の麻に関する情報を集めた。鳥取大学家中研究室らの協力による本『恵みの山に想いを馳せる—智頭町山形の聞き書き—』に昔の麻栽培に関する記述を見つけた。麻の実を炒ったものを混ぜた麻味噌を食べる文化、地元で有名な山菜料理屋にも麻の実を使った豆腐料理が今

でもあることも分かった。そして、麻繊維がとれたら、日本三代実録に記載のある由緒ある神社の鈴縄や注連縄に使ってもらおう協力も得た。古老たちには麻の重要性を書いた直筆の手紙を用意し、映像資料を作成するなど着々と準備を進めたのだ。

県庁への一度目の提案時には「大麻の免許など簡単にとれるものではない」と厳しい反応だったが、二度目は「監視カメラや柵などを準備しなければいけないのですが、その辺りは心得ていますか？」と態度が少し変わり始めた。三度目の協議の際には「栽培免許を出すので、必要な準備をしておいてください」という話になった。

振り返れば、13年3月6日に最初の申請交渉をして、翌4月30日に正式許可の電話が入り、5月2日には実際に免許証が届くという、麻栽培免許の超スピード取得が実現していた。地元の古老・移住者・町長の見



写真1：60年ぶりの麻栽培復活に貢献した綾木さん(左)、上野さん(中央)、寺谷町長(右)

事な連携プレーだった(写真1)。その後、上野さんの弟、淳哉さんが共感して同町に移住を決意し、5月の種まき段階から合流した。

60年ぶりに桶蒸法を復元

昔から西日本全域では麻茎を蒸して繊維をとるという麻蒸法が行なわれていた。細かく分けると石蒸法、桶蒸法、箱蒸法などの蒸し方がある。

8月のある日、麻栽培復活を知った隣の集落の古老が「昔使っていた大きな桶がある。ぜひ使ってほしい」と上野さんを訪ねてきた。群馬県での栽培経験しかない上野さんは最初、桶の利用法がわからない。調べてみると現在は誰もやっていない桶蒸法と呼ばれる幻の方法で使う道具だった。そこで、地元の方々や



写真2：限界集落に200名が参加した「桶蒸公開実験」の様子

町役場の協力を得て9月28日に「桶蒸公開実験」としてやってみることにした。

正式にはコシキ(甑)と呼ばれる桶は、高さ2・5m、直径90cmほどある。平釜に入れた水を沸騰させて蒸気を発生させ、桶の中に敷き詰められた麻茎を3時間ほど蒸すことで、アラス(荒苧)をとる(写真2)。

驚くべきことに、この公開実験のために全国各地から200名もの老若男女が限界集落に集まったのだ。桶を縄で引き上げるときに皆で「麻ひらき!」と掛け声をかける。世代を超えて会場の気持が一つになった瞬間である。約60年前の栽培事情を知る4名の古老たちから麻糸や麻

表1：中国・四国地域の麻栽培の状況

(単位：ha)

県名	1936年 (昭和14年)	1955年 (昭和30年)	1991年 (平成3年)	2004年 (平成16年)	2014年 (平成26年)
鳥取	21.2	6.0	0.28	0	0.68
島根	181.0	25.0	0.11	0	0
岡山	8.4	8.7	0	0	0
広島	688.5	72.0	0	0	0
山口	2.6	0.0	0	0	0
徳島	不明	不明	0.36	0	0
香川	0.1	0.0	0	0	0
愛媛	7.5	0.8	0.56	0.94	0
高知	7.1	1.8	0.86	0.17	0

引用：「大麻のあゆみ」長野大麻協会(1965年)、厚生労働省の資料

地域活性化の目玉として

13年は譲渡された種子が少なかつたため、まずは播種用の種子を増やすために23a全面に栽培した。もともと水田だったので、水はけが悪く、1年目の種子収量は通常の半分以下の約80kgだった。

麻の免許は毎年12月31日に更新が必要で、その度に県当局と交渉しな

布の現物を見せながらの麻についての語りは、多くの人に感動を与えた。同時に古老たちにも「若い人が麻に興味をもってくれてうれしい。寿命が5年伸びたよ」と。この感動体験は、複数のマスコミに大きく取り上げられ、町の広報誌の表紙も飾った。



写真3：日本初の麻漫画「よのあさ」の表紙

なければならぬ。それも無事にクリアし、14年は作付面積を増やして68aになった。現時点で全国の麻の作付面積5・5haの12%を占める、中国・四国地域では唯一の麻畑である(表1)。10aを繊維収獲用に、残りの58aを種子用に利用する。種子畑事業(麻味噌、麻油、麻茎から花火原料用の麻炭の製造)、繊維畑事業(アラス・コギソの製造、技術継承、オガラから麻炭製造)、交流事業(麻畑体験、年間・1日・半日の3コース制)、麻漫画『よのあさ』(写真3)や聞き書き集の出版、「森のようちえん」とのコラボ企画などの事業を展開していく予定だ。

文献によると100年前はかつての智頭郡だけで麻栽培が55haで行なわれていたという。昔の伝統を守りつつ、今の衣食住に役立つ新しいニーズに応じていく――、まさに地域活性化のモデルを目指している。同町のこれからの挑戦は、きっと日本の麻開きになるに違いない。(終)